

## 令和 4 年度 県立古河第三高等学校自己評価表 (項目)

目指す 学校像	「自立・敬愛・創造」の校訓のもと、一人一人の個性と資質・能力の伸長を図り、広く社会に貢献することができる人材を育成する。 ○ 自ら学び、考え、判断し、行動できる生徒を育む学校 ○ 他者への思いやりの心にあふれた生徒を育む学校 ○ 柔軟な思考で未来を切り拓く力をそなえた生徒を育む学校		
昨年度の成果と課題	重点項目	重点目標	達成 状況
<p>大学入試共通テスト2年目で数学I・Aの難化に悩まされながらも、大学の合格者数は国公立大学が25名、私立大学がのべ484名であった。さらに、昨年度に引き続き立教大などを含め17以上の繰り上がり合格があり、最後まで挑戦した生徒がチャンスを掴んだ。その結果、進路希望調査等による第一志望現役合格者は104名(51.7%)であった。また、専門学校と短大も含め、総合型選抜、学校推薦型選抜に挑んだ生徒のべ62名中50名(80.6%)が合格となった。5月から開始したプレゼン大会等の指導が実を結んだ結果となった。部活動においては、コロナ禍の中、様々な大会が制約を受けた中でも、生徒達は自主的にかつ積極的に活動した。学習の成果のみならず、特別活動や学校行事に関しても、文化祭や球技会を実施し、生徒の主体的な取り組みと共に望ましい成長を実感できた。</p> <p>生徒募集においては、6年連続で志願者数が定員を下回った。志願倍率も2年連続で減少した。コロナ禍により広報が十分にできなかったことも影響していると思われる。広報の手段や機会のさらなる工夫が必要である。</p> <p>これまで以上の教育活動の充実を図り、地域の伝統校として地域の期待に応えるとともに、信頼を確立する。主体的で積極的な学習意欲を喚起し、学びの楽しさを実感できる授業を目指し、豊かで確かな人間力の育成を図る。交通事故件数は減少しており、警察等との連携により安全教育の充実を目指す。学校安全に全職員で取り組む覚悟を持つ。</p>	1 生徒が希望する上級学校進学を実現する	①1年「自己発見」2年「自己発展」3年「自己実現」をめざし、進路行事や面談、普段の対話から生徒の知っている世界を広げる。 ②進路講演会、「進路だより」の発行、学校ホームページ等を活用して生徒・保護者に適切な情報を提供し、動機付けをする。 ③上級学校の公開講座の受講、オープンキャンパスへの参加を進め、職業・大学・学部・学科について理解を深める。	A
	2 家庭学習の習慣化	④外部模試結果等の分析を定期的実施するとともに効率的な運用により、学習意欲を向上させ、学習時間を増進させる。 ⑤シラバスや生徒意識調査結果等を生徒に提供し、進路実現に必要な学習時間を定量的に分析し、生徒自身に中・長期的学習計画を立てることの重要性を認識させる。	B
	3 豊かな人間性を身につけるための取り組み	⑥授業や課外活動を通して生徒の自己有用感を高揚させ、自律・自立の心を育てる。 ⑦豊かな人間性を育むために、教養講座等や図書館の蔵書を有効に活用する。 ⑧集団活動や体験活動を通して生徒の社会性を育み、併せて実践力の向上に努める。 ⑨部活動・生徒会活動・JRC委員会・学校行事など教科外活動を充実させ、責任を持って行動する態度を育てる。	B
	4 広報活動の充実	⑩学校公開・中学校訪問・塾訪問・ホームページの活用を通して、小・中学生やその保護者や教員に対して、積極的に本校の良さをアピールする。	B
	5 個に対応した指導	⑪生徒との信頼関係を築くため、担任との三者面談週間を少なくとも年2回実施する。また、二者面談も積極的に実施する。 ⑫学習指導要領に対応した授業進度・レベルを再考し、理解力向上を図る。	A
	6 学校安全の徹底	⑬学期毎に実施する定期点検の内容と精度を高め、全職員・全生徒の防災意識を高め、危険察知能力の向上を図り、安全安心な学校環境を実現する。	A
	7 働き方改革の推進	⑭みんなで協力する体制づくりをすると共に、時差出勤制度を積極的に活用し超過勤務時間の減少を図る。	B

評価基準

A：十分達成できている

B：達成できている

C：概ね達成できている

D：不十分である

E：できていない

三つの方針		具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
「三つの方針」 (スクール・ポリシー)	「育成を目指す資質・能力に関する方針」 (グラデュエーション・ポリシー)	「自立・敬愛・創造」の校訓のもと、一人一人の個性と資質・能力の伸長を図り、広く社会に貢献することができる人材を育成する。 ○自ら学び、考え、判断し、行動できる生徒。 ○他者への思いやりの心にあふれた生徒。 ○柔軟な思考で未来を切り拓く力をそなえた生徒。	B	B	自己の将来像を意識すると共に、他者及び社会に目を向けることができる生徒を育成する。
	「教育課程の編成及び実施に関する方針」 (カリキュラム・ポリシー)	○授業こそが最も実力を上げる場であることを浸透させ、三年間の生徒育成計画のもと密度の濃い授業の実践・研究を図る。 ○確かな学力をもとに将来への目標を生徒自ら設定し、進路希望実現のために邁進できるアクティブラーナーを育成する。 ○部活動・特別活動及びボランティア活動等の体験活動や道徳・探究の授業を通して、多様性を尊重し言葉を通じてコミュニケーションをとりながら社会貢献を目指すグローバル市民の育成を図る。			新教育課程に対応するための授業改善を進めると共に、特別活動の更なる充実を図る。
	「入学者の受入れに関する方針」 (アドミッション・ポリシー)	○意欲にあふれ、自ら学び行動する生徒。 ○多様性を尊重し、言葉を通じてコミュニケーションをとりながら社会への貢献を目指す生徒。 ○将来的に地域の政治・経済・文化等を牽引することができる生徒。	B		入学者が、強い希望をもって志願できるような本校の取組について広報活動を推進する。
評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
国語	基礎学力の向上を図る	・小テスト等を利用して、学習の理解度を把握し、不十分な生徒へは補習を実施する。	B	B	新課程への対応や評価方法の確認、再検討をすることが必要である。また、3年間を通して生徒につけたい力を明確にし、学年間での情報や意見を積極的に交換することも課題である。
		・個に応じたきめ細かな指導を行い、その成果と課題を明確にする。	B		
		・学習内容の定着のため、教員へ質問しやすい状態を作り、放課後等を効果的に利用する。	B		
	進路実現のため自主学習定着に努める	・ノート・課題等を定期的に点検し、自主学習の習慣をつける。	B		
		・予習・復習のやり方、模試の解き直し等の指導を通じて、継続的に学習する方法を身につけさせる。	C		
		・小論文や参考書コーナーを図書館内に設置し、自主的に学習できる環境作りをする。	C		
		・大学入試の傾向と対策を指導し、自主学習の内容に役立たせる。	B		
わかる授業の工夫、改善に努める	・シラバスを作成し、目標に添った授業計画を立案する。	B			
	・各種研究会、研修会に参加し、自己研鑽に努める。	C			

評価基準 A：十分達成できている B：達成できている C：概ね達成できている D：不十分である E：できていない

地歴 公民	基礎学力の向上と定着及び授業 研究の推進	・小テスト・課題プリント・レポート等を用いて、基本的事項の確認と確実な定着を図る。	A	B	新課程への対応や ICTの活用が課題で ある。 授業の工夫は継続し ていく必要がある。
		・わかりやすく効果的な授業を目指し、教員間の研修を行う。	B		
		・生徒の自発的学習を促し、学習意欲を高められるよう、授業を工夫する。	B		
		・知識・理解の定着のために、問題集を効果的に活用する。	B		
数学	基礎・基本の定着を促進する	・单元ごとに考査を実施することで、学習のつまずきを早期に発見し対応する。また、必要に応じて補習を実施する。	B	B	タブレット等、ICT の効果的な活用は、 課題である。 土曜課外等で習熟度 別にするなど工夫 に努める。
		・映像資料やパワーポイント、1人1台端末等のICTを活用し、数学的な事象に対する関心や理解を深める。			
	家庭学習の習慣化に努める	・考査ごと(定期的)に問題集用のノートを提出させることで、家庭学習の動機付けを行う。	A		
		・長期休業中には課題を与え、学期中の復習ができるようにする。	B		
		・シラバスを元に目標を意識させ、計画的に予習や考査の準備ができるようにする。	B		
		・模擬試験を利用して、家庭において発展的な内容に自主的に取り組む習慣を付ける。	B		
	進路実現のための指導を工夫する	・模擬試験を通して、学習の定着の状態を認識させ、自分の課題に気づかせる。	B		
		・各種課外では、レベル別講座やコース別講座など講座内容を工夫して実施する。	B		
・各研修会に参加し、入試問題などの分析を行い、生徒に還元する。また、互いに授業見学を行い、研修に努める。		C			
理科	実験・観察を通して自然現象に 対する興味・関心を高めるとと もに、基礎的な学力の向上と定 着を図る。	・学習内容の理解度を把握するため、小テストを実施する。また、課題を提出させることで知識の定着を図る。	B	B	授業の相互参観を行 い、授業技術の向上 に努める。 観察・実験を実施し て、技能習得に努め る。
		・映像資料やパワーポイント等のICTを活用し、科学的な事象に対する関心や理解を深める。	A		
		・3年では課外を通して発展的な内容に取り組み、生徒の学力向上を図る。	A		
		・授業の相互参観など教員間の研修を行い、自己研鑽に努める。	D		
		・観察・実験を通して、自然現象への興味・関心を高め、基本的な実習技能を習得させる。	C		
保健 体育	たくましく生きるために健康や 体力の向上を図る	・さまざまな健康課題に対して、適切な意志決定・行動選択ができるよう、知識の習得と健康的なライフスタイルを身につけさせる。	A	B	主体的に活動する生 徒は増加している。 体力テストの記録向 上を目指す。
		・学習活動を通して主体的に運動に取り組み、体力テスト総合評価段階A及びBを55%、D及びEの生徒を10%以下に減らす。	C		

評価基準

A：十分達成できている

B：達成できている

C：概ね達成できている

D：不十分である

E：できていない

芸術	芸術に対する興味・関心の向上	・鑑賞と表現活動とのバランスのとれた授業を实践、美的体験を重ね芸術への興味・関心を高める。	B	B	生徒自ら考えて表現する様子が窺えた。次年度も鑑賞と表現のバランスのとれた授業を行う。
	鑑賞力・表現力の育成	・芸術と様々な文化（歴史・風土・言葉・諸芸術）との密接な関連を理解させ鑑賞する力を育てる。	B		
		・生徒の自主計画による学習を实践し表現方法を自ら考えさせる。	A		
外国語 (英語)	基礎学力の定着	・1学年では、英和辞書や参考書、音声教材などを効果的に活用する学習習慣を確立させる。読んだり聞いたりした英文の内容を理解させ、身近な話題に関する自分の考えや意見を発信する力を養う。	C	C	ICTの活用は進んでいる。さらに語彙や文法などの知識の定着や表現活動に有効な方法を探り、教科内で情報交換しながら進めていく。主体的に学習する姿勢を身に付けさせる。
	演習の充実	・2学年では、文法・語法テストを計画的に行い、練習問題や英作文などを通して文法等の知識を定着させるとともに、読解力の増進を目指す。また、スタディサプリ English の使用や課外授業（内容：Listening 中心）を通して自然な発音に慣れさせ聴く力を高めて、自ら英語で表現する力を育てる。	C		
	入試レベルの実力の養成	・3学年では、リーディングスキルや自己発信活動に役立つスキルの養成を第一とした授業を展開する。また、リスニング・文法語法テストを定期的実施し、実践的な学力の定着を図る。	C		
家庭	基本的知識と生活技術の習得・向上	・多様な教材の活用と発問の工夫により、学習内容に興味・関心をもたせ、日常生活に必要な基本的な知識と技術を習得させる。 ・生活技術の実力試験・実技試験によりその向上を図り、生徒自身が成長を実感できる授業を展開する。	B	C	外部講師による講義・実習は効率的で生活に役立つ内容であった。次年度は、短時間でできる実習の時間を増やす。また、実習を主体的に進められるような工夫をする。
	家庭生活の充実・向上を図る実践的態度の育成	・調べ学習等を通し、社会生活に関わる家庭の問題について視野を広げ、家庭生活の課題解決と充実・向上の必要性に気付かせる。 ・実験・実習を通し、家庭生活に生かせる実践的な態度を育てる。	C		
	課題解決能力の向上	・実験・実習では、課題を明確にし、個人目標・グループ目標を設定して取り組ませ、振り返りをその後の活動に繋げるようにする。 ・課題解決学習「ホームプロジェクト」を通し、家庭における自分の役割を認識させ、個々の自立や家庭生活の改善・向上に生かせるようにする。	D		

評価基準

A：十分達成できている

B：達成できている

C：概ね達成できている

D：不十分である

E：できていない

教務	授業時間の確保	・授業時間確保に努め、出張等の授業の振替率96%以上を維持する。	A	B	学習評価の方法について、検証、改善を重ね、より良いものを目指す。広報活動の方法を工夫し、現在の本校の状況が伝わるようにする。
		・授業時間の有効な利用のためにも「授業開始のチャイムは教室で聞く」という、共通理解を徹底する。	B		
		・曜日別の授業予定時間数をもとに定期考査ごとに曜日変更を行い、可能な限り総授業時間数の均一化を図る。	A		
	広報活動の充実	・学校公開・中学校訪問・塾訪問等を通して、小・中学生やその保護者や教員、また地域に対して、積極的に本校をアピールする。また、HPを有効に活用する。	B		
		・魅力のある学校案内・学校紹介ポスターを作成・配布し、本校の特徴を中学校・塾に伝える。	B		
	新学習指導要領への対応	・「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善や学習評価の工夫、教育課程の改善を図る。	B		
校務支援システムの活用	・統合型教務支援システム(教助)の運用体制の確立を図る。	B			
進路指導	I 10月実施の進路希望調査にて進路の別の未定者を各学年2%以下にする。 II 10月実施の進路希望調査にて大学進学希望者の学部系統別未定者を1年25%以下、2年10%以下、3年5%以下にする。 III 民間就職内定率100%を継続する。 IV 進路調査における第一志望現役合格率50%以上にする。 V ベネッセGTZでB1レベル以上の大学合格者100名以上にする。	1年「自己発見」 2年「自己発展」 3年「自己実現」 ・進路希望調査、進路・学習に関する意識調査を実施し、生徒の実態を把握するとともに問題点の検討とその改善策を講じて学年の適切な進路・学習指導をサポートする。 ・生徒の進路希望状況を分析し対策を講じ希望実現をサポートする。 ・進路行事や面談、普段の対話から生徒の知っている世界を広げる。	B	B	卒業生や大学教授、地元企業を招いて、進路講話を実施した。I 進路別未定者1年5.0%、2年3.0%、3年0%、II 学部系統別未定者1年20.2%、2年7.9%、3年2.3% III 民間就職内定率100%を継続している。 土曜課外・夏季課外を生徒の関心を高めよう実施時期・方法を改善する。
		・進路講演会、「進路便り」の発行、学校ホームページ等を活用して生徒・保護者・教員に適切な情報を提供し、動機付けをする。	B		
		・上級学校の公開講座の受講、オープンキャンパスへの参加を勧め、職業・大学・学部・学科について理解を深める。	A		
		・生徒の進路希望に応じ、効果的で十分な指導を検討・実践する。	B		
		・入試・模試結果を分析し、学年や教科の実態を把握し、学習・進路指導の改善に努める。	B		

評価基準 A:十分達成できている B:達成できている C:概ね達成できている D:不十分である E:できていない

生徒指導	1 基本的な生活習慣の確立	・スクールカウンセラーとの連携を密にして、多様化する生徒の悩みに対応する。	A	A	中高生の自殺が増加傾向にあるため生徒の状況を見極めながら職員間の情報共有が必要である。また SNS の適切な利用についても引き続き注意が必要である。	
		・挨拶の習慣化を目指す。	B			
		・部活動や様々な学校行事を通し、生徒の自己肯定感、自己指導能力の向上に努める。	A			
	2 安全教育の徹底	・地域や警察、関係諸機関との連携を密にし、事件・事故の未然防止と早期対応に努める。	A			
		・外部講師を積極的に活用し安全意識の啓発に努める。	A			
		・生徒会活動を中心に、情報安全に関する自主規制や交通マナーアップを推進する。	B			
	3 危機管理体制の強化	・面談等を通し生徒とのコミュニケーションの緊密化を図る。	A			A
		・アンケートによるいじめ、体罰、パワハラ等の未然防止・早期対応に努める。	B			
		・地域と学校との共存	A			
	4 社会人としてのモラル・マナーの習得	・マナーアップ強化週間を通しての啓発活動	B			A
		・SNS の正しい利用についての意識啓発	A			
		・生徒会を中心とした自主規制意識の醸成	A			
特別活動	特活関係行事全体を見直し、生徒の自主的活動を推進する体制を整備する	・各行事の計画は、年間計画を見据えた上で立案する。	A	B	各行事を計画通りに実行できた。これを更に発展させることができるように学年や各分掌と連携していきたい。	
		・各行事の企画・運営にあたっては、各学年や各分掌との連携を十分に図る。	C			
		・各行事では、生徒の自主性・創造性が発揮できる環境や機会を提供できるように計画する。	A			
		・各行事においてコロナ対応を含めた安全管理をしっかりと行う。	B			
	生徒会活動の活発化と充実を図る	・各委員会の計画的で活発的な活動を推進する。	A			
		・文化祭・球技会では、生徒の自主性・創造性が発揮できるように十分検討し、改善する。	B			
		・さわやかマナーアップキャンペーン等に積極的に参加し、規範意識の高揚やマナーの遵守に努める。	B			
	部活動の充実	・運動部への加入率を増加させるとともに、退部する生徒数の減少をめざす。活動時間を確保し、心身のたくましさや豊かな心を育成する。	B			
		・部活動の運営・予算等の問題点について検討し、改善を図り、施設・設備の充実に努める。	B			
	知新館の有効利用	・知新館(合宿所)の適正・有効な利用を図ると共に、施設・備品等の整備に努める。	C			

評価基準 A：十分達成できている B：達成できている C：概ね達成できている D：不十分である E：できていない

保健 厚生	生徒の心身の健康増進	・日常的、定期的に健康観察・保健調査・健康診断・健康相談を実施し、生徒の心身の管理に努める。	A	A	新型コロナウイルスを含む感染症対策や自己の健康観察を継続して行えるよう、情報提供及び環境設定に努める。 防災意識や危険察知能力を高めるための情報提供に努める。
		・疾病・感染症予防、日常の生活における健康増進、保健室利用状況等について「保健便り」を発行し、生徒の心身の健康に関する知識、管理能力を高める。	A		
		・専門家による性教育講話を実施し、生徒の心身の健康に関する知識、管理能力を高める。	A		
		・防災避難訓練を充実させ、防災意識、危険察知能力を高める。	A		
	学校環境の整備	・清掃用具の管理、清掃指導を徹底し、学校環境の美化等情操面への配慮に努める。	A		
		・施設設備(扇風機・エアコンを含む)の衛生管理・安全点検を日常的、臨時的に実施する。	A		
	・環境衛生検査(教室内の空気・照度・飲料水、放射線量)・安全点検(使用施設の営繕調査)を定期的に実施し、安全安心な学校環境を実現する。	A			
図書	図書館利用の促進	・生徒の読書活動・読書指導の場である「読書センター」としての充実を図る。	B	B	図書館利用者を増やす。 視聴覚室の活用は視聴覚としての活用は各教室で行い、授業や課外での活用のみになってしまっている。視聴覚室としての名目の必要はなくなっている。
		・生徒の学習活動支援・授業充実の場である「学習センター」としての整備を図る。	B		
		・生徒・教職員の情報ニーズへの対応や情報収集・選択・活用能力育成の場である「情報センター」としての充実を図る。	B		
		・図書専門委員会を定期的に開催し、図書館便り・カウンター業務・展示コーナー作成・行事参加・生徒図書委員研修会への参加等、生徒が積極的に動ける委員会活動を目指す。	B		
		・視聴覚教材・資料の充実を図る。	C		
		・授業に利用できる図書館・視聴覚室作りを進める。	B		
渉外	学校と保護者、同窓会との連携を密にして、PTA・同窓会の活動の円滑化、充実を図る。	・PTA総会や授業参観、学校公開・文化祭等の各種学校行事への参加を保護者に呼びかける。	C	C	PTA行事・組織の見直しと、それに伴う役員体制の変革を考える必要がある。
		・本校のホームページを利用してPTA活動の広報に努める。	C		
		・地区別PTA等のPTA活動に教職員も積極的に参加する。	B		

評価基準      A：十分達成できている      B：達成できている      C：概ね達成できている      D：不十分である      E：できていない

1 学 年	基本的生活習慣の確立	・挨拶や礼儀、普段の言葉遣いや身だしなみ等、きまりを守る生徒を育成する。	B	A	・自己管理の徹底(手帳の活用) ・スマホの使い方改善策を検討 ・制服の着用方法や身だしなみに関する指導体制の構築
		・欠席・遅刻・早退をしないよう規則正しい生活を心掛けさせ、日々の体調管理に気を配る。欠席・遅刻連絡を含め、保護者との連携を密にすることで、学校と家庭との協力体制を構築する。	A		
		・面談等を通し、生徒個々へのきめ細かな指導を行うための共通理解・情報共有を行う。	A		
		・授業の開始時間や行事等の集合時間を守るなど、時間を厳守する態度を育てる。	A		
		・清掃や委員会活動などにおける役割分担を明確にし、所属意識を醸成する。	A		
		・「今、すべきことは何か」を考え、状況に応じた適切な態度・行動ができる生徒を育成する。	B		
	基礎学力の向上	・将来に向けた具体的なイメージを掴むことができるよう、段階的に進路情報を明示する。	A	B	・学習習慣の定着・確立、伸長に向けた取り組みを継続 ・小テストの実施方法や時間帯について再検討
		・3年後の自己実現を図るためにも、学習の積み重ねが重要であることを理解させ、家庭学習を習慣化させる。特に、授業を大切にす姿勢を身につけさせる。	B		
		・授業を大切に、課外や校外講座を積極的に利用しながら、広く考えを深める体験をさせる。	B		
		・定期考査や校外模試への動機付けを積極的に行い、偏差値 50 を超える生徒が半数以上、55 を超える生徒が 50 名以上を目標とする。	B		
		・成績不振の生徒及び保護者に対し学年主任面談を行い、家庭の協力を求める。	B		
		・成績と学習時間の相関関係や学習の成果を見える化し、生徒のやる気を喚起する。	A		
	良好な交友関係・連帯意識の育成	・スプリングセミナーを実施し、新たな交友関係の構築及びクラスづくりの一助とする。	A	A	・3年間を通じた探究活動という視点が必要(学校としての方針)
		・LHR等を利用したクラス単位の活動や学年単位でのクラスマッチ等のレクリエーションを通し、集団の一員であることを自覚させ、連帯意識の向上に努める。	A		
		・文化祭や球技会等の学校行事、部活動やボランティア活動等に積極的に参加できるような声掛けや雰囲気をつくる。	B		
		・探究活動を通して自己の意見を深化させ、多様な意見を享受しながら「敬愛」「自立」の精神の育成を図る。	B		
	進路の意識付け	・スプリングセミナーやLHR、授業時間を通して学習の意義と目的を考えさせる。	A	A	・配付資料の精選 ・模試分析会の活用 ・進路指導法の深化・促進
		・事後の教科指導に反映させるため、外部模試の後には分析会を実施する。	A		
・文理分け説明会や進路講演会、三者面談を通して、生徒および保護者の進路意識を向上させることで、2年次の適切な文理選択を実現する。		A			

評価基準 A:十分達成できている B:達成できている C:概ね達成できている D:不十分である E:できていない

2 学 年	自己管理力の育成	・生徒心得等のルール（礼儀・身だしなみ・挨拶等）を遵守する規範意識を高める。	C	C	全体的にはよくできている。少数ではあるが、遅刻が常態化している生徒が見られる。学生服を着てこない生徒が多数になっている。
		・欠席・遅刻・早退をできるだけしない雰囲気づくりをする。欠席・遅刻等が多い生徒は、保護者との連携を密にし、面談等のきめ細かい指導をする。また、欠席・遅刻・早退をする際は、保護者から学校へ連絡することを徹底させる。	C		
		・着席してチャイムを待つ、集合時間を守るなど、時間を遵守する態度を育てる。	B		
		・清掃・委員会など役割分担を明確にし、自ら考え責任を持って行動する態度を育てる。	B		
	学習意欲の向上	・将来の進路実現に向けて、学習の大切さを理解させる。とくに授業に真剣に取り組む姿勢を身につけさせる。	C	C	授業は真剣に取り組むことができている。家庭学習の定着が課題である。
		・進路講話等において家庭学習の重要性を意識させ、「予習⇒授業⇒復習」の黄金のサイクルが習慣化するように指導する。	C		
		・課外、校外模擬試験に積極的に取り組ませる。なお、校外模試において偏差値 50 を超える生徒が 100 名以上、55 を超える生徒が 50 名以上を目標とする	C		
		・前、後期末に成績不振の生徒の保護者を召喚し、家庭の協力を求める。	B		
	主体性および連帯意識の育成	・目的意識をもって主体的に修学旅行に臨ませる。	B	B	修学旅行が 3 年ぶりに実施できた。生徒の衛生意識の高さからコロナも旅行中は発症者がでなかった。
		・クラスへの帰属意識を涵養し、文化祭や球技会等の学校行事に主体的に参加させる。	B		
		・LHR等を利用したクラス単位の活動や、学年単位でのレクリエーション行事を生徒主導で実施することにより、自主性および連帯意識の向上に努める。	C		
		・部活動・ボランティア活動等への積極的な参加や「総合的な探究の時間」の授業を通して、「敬愛」「自立」の精神を育み、主体的に行動できるリーダーの育成を図る。	B		
	進路目標の設定	・様々な進路行事を通して学習の意義と目的を考えさせ、日々の積み重ねが進路実現に関わることを理解させる。	C	B	進路の決定に向けての意識づけのタイミングが遅くなったが、コース選択は、よく考えられている
		・卒業生ゲストトークやキャリアガイダンス等を計画的に実施し、進路の方向性を見極めさせ、次年度の適切な進路選択を実現する。	C		
		・外部模試分析会を実施し、進路指導と教科指導の連携を図る。	B		
		・コース分け説明会や進路講演会、三者面談を通して、受験に対する知識や造詣を深め、次年度は受験生であるという自覚と意識をもたせる。	B		

評価基準      A：十分達成できている      B：達成できている      C：概ね達成できている      D：不十分である      E：できていない

3 学 年	自律的な精神の育成	・社会生活において基本となる身だしなみや言葉遣い、挨拶などの重要性を理解し、自主的に実践することを徹底させる。	B	B	一部の生徒の服装が乱れていたが、統一した指導ができなかった。学年で十分に共通理解を図る必要があった。
		・自己管理の意識を高め、欠席・遅刻・早退をしない基本的な生活習慣を身につけさせる。	C		
		・生命を尊重し、互いに安心・安全な生活を送るため、交通ルールや社会法規を遵守する態度を育てる。	C		
		・社会規範を守りながら、適切に SNS 等を利用できるよう、啓発する。	B		
	進路実現に向けた学力の獲得	・一人一人の生徒が希望する進路を実現するための、十分な学力を身につけさせる。	C	B	サマセミは行うことができたが、学年全体で取り組んだ行事が少なかった。
		・授業をより充実したものにするために、「予習⇒授業⇒復習」を徹底させ、学習内容の定着を促す。	B		
		・積極的に課外授業への参加を推進し、学習指導の充実を図る。	C		
		・自ら学習する姿勢を育成することで、受験生として必要な学習時間を確保し、学習の質を高めさせる。	B		
	連帯意識の醸成	・学校行事に主体的に参加させ、クラスや学年としての連帯感を持たせる。	B	B	コロナ禍のため制約はあったが、学校行事に積極的に取り組んでいた。
		・学校行事や部活動を通して、組織をリードすることのできる生徒を育てる。特に部活動においては、最高学年としての役割を果たすように意識させる。	A		
		・体験活動や校外での活動に積極的に参加させることで、相手を思いやり、互いに協力する「敬愛」の精神を育む。	C		
	進路希望の実現	・校訓である「自立・敬愛・創造」の意義を十分に理解させ、それらを実践することで進路実現へと導く。	C	C	進路決定における「自立」については、不十分であった。校外模試をもっと有効に活用したい。
・自分の進路について様々な角度から主体的に検討し、目標に向けて自主的に努力し、「自ら動く」姿勢を身につけさせる。		B			
・外部模試分析会を実施し、進路指導と教科指導との連携を図る。		C			

評価基準      A：十分達成できている      B：達成できている      C：概ね達成できている      D：不十分である      E：できていない